

「革命中国」への挽歌

— 知識人論として —



中嶋嶺雄

私が現代中国に関わるようになってから、ちょうど三十五年が過ぎた。中国という大きな対象は、今日もなお混沌としていて、あたかも霧の間に間に見えかくれする巨峰のように、あるときはかなりはっきり輪郭を見せたかと思うと、また一瞬のうちに視界から遠ざかってしまう。八〇年代後半以来の「開放」中国が、昨年六月の天安門「血の日曜日」事件を転機にまったく違った相貌を露わにしつつ、その全体像が再びとらえにくくなっている現状も、このことを示している。

想えば、このような現代中国と三十五年間も格闘してきたことになるのだが、その私も当初は、中国の現状を分析したり、将来を予測したりするために、中国研究を志したのではなかったと思う。やはりなんといっても中国のもっとも大きな吸引力は、この国が「革命中国」になったことであつた。あるいは、マルクス主義ないしは社会主義が中国を揺り動かしたからだ、と言つてもよいであろう。今日の中国は、一九八九年後半以来の、つまり中国の天安門事件を悲劇的な代償として現代史を大きく塗りかえつつある社会主義世界の歴史的な解体過程において、なおマルクス主義と社会主義の優位性を頑なに唱えている数少ない国家ではあるが、そのような中国を

とらえるためにさえ、マルクス主義や社会主義の尺度はもはや有効性をもたなくなつてしまった。

このように考えてみると、現代中国に私が関わってきた過去三十五年間だけをとってみても、どのような時間帯において中国に関わるかによって、その認識の座標軸が異なることはもとより、中国に関わる側の思想的位階が様々なたちで浮き彫りされてくるといわざるを得ない。ましてや、「革命中国」という鏡に映して見ようとした場合はなおさらのことであり、ここに中国という対象が他の社会や国家と大きく異なる問題性を、とくにわが国の知識人にたいして付与してきたという中国の特異性 (China difference) があるのだといえよう。

私が今回、筑摩書房から上梓した評論集「中国革命とは何であつたのか」に、私とは原体験や考え方がそれぞれ大きく異なりつつも中国を問う点で共鳴するお二人の知識人、つまり内村剛介氏および小田実氏との「ちくま」誌上で二つの対談を収録させていただいた理由の一端もこの点にあつた。

さて、マルクス主義ないしは社会主義と中国という観点でいま思い起される知識人として、梅本克巳と三浦つとむという亡き二人の

対照的な哲学者に触れてもよいであろう。梅本氏はかつて、中国革命の原像を探るうえで実に鋭い啓示を与えてくれたのだが（たとえは「現代思想入門——現代とは何か——」、三書房、一九六三年、参照）、毛沢東思想と文化大革命に幻惑された晩年の中国認識は痛々しいほどであつた（対談「毛沢東思想と現代の課題」〈遠坂良一氏との対談〉、三書房、一九七二年）。一方、三浦氏は、すでに早くから独自のスタリリン哲学批判を通じて毛沢東思想のからくりをすっかり見ぬいていたように思う。この点は、氏が「六〇年安保」の時期に相次いで刊行して注目された「大衆組織の理論」（一九五九年）、「指導者の理論」（一九六〇年）の二著（いずれも勁草書房）にも示されている。ところで、昨年のあの天安門事件を自撃して以来、いずれも非マルクス主義の立場ながら「革命中国」に関わつた亡き三人の知性のこと私にはしばしば想ひ起していた。それは中国文学者の竹内好、作家の武田泰淳、社会学者の清水幾太郎のいずれも戦後日本の思想界や論壇に大きな足跡を残した人びとである。

『北京烈烈』、「文明の再創造を旨とする中国」（いずれも筑摩書房）にも、今回の著書にも収めているので、ここでは詳述しないが、いずれにせよ竹内氏が「革命中国」にあれほどこだわつたのは、そこに従来の革命国家にはない「民主」を見出したからであつた。それだけに、「民主」であるはずの国に澎湃と起つた民主化運動を統制し、今日の中国の変貌は、竹内氏の中国との関わり合いの時間帯のもつ意味を改めて考えさせてくれる。

私は竹内氏の現代中国論や魯迅論に強い影響を受けて育つた者の一人であつたが、「六〇年安保」に際しては、私が当時の全学連主流派に位置していたこともあって、氏の主張する「民主主義」擁護一点張りの観点にどうしても同調できず、たしか文京公会堂で開かれた学者・文化人の集会での竹内氏の講演にたいして、思わず「ナセンスス！」と叫んでしまったことがあつた。その竹内氏とは、個人的にお話しする機会はついになかったが、私が氏の名著「現代中国論」（一九五一年初版は河出書房）に敬意を表しつつ、同名の私の処女作「現代中国論——イデオロギーと政治の内的考察——」（青木

読書の秋は古書の季節

古書全般高価買入れ

- ☆探求書
- 上林峯全集 新版 筑摩書房
- 中野重治全集 新版 岩波書店
- 柳宗悦全集 既刊 中央公論社
- 大田南畝全集 踏 岩波書店
- 百 花 全 集 講 談 社
- 定本 西 鶴 全 集 中央公論社
- 宇野浩二全集 講 談 社
- 亀井勝一郎全集 集 英 社
- 佐多稲子全集 新 湖 社
- 藤枝静男著作集 集 英 社
- 吉田健一著作集 新 湖 社
- 定本 モラエス全集 教 平 社
- カフカ全集 新版 教 平 社
- 三島由紀夫全集 教 平 社
- カーライル選集 教 平 社
- ベスターロッチ全集 教 平 社
- 小説、詩歌句、評論、隨筆
- 限定本、版面、趣味、書誌
- 哲学、思想、歴史、法律、社会
- 英独仏の文科系洋書全般

全国各地へ出張致します
●地方からのご発送は送料負担します
・当店のご案内は
新潮社「波」
岩波書店「図書」
もご参照下さい。



第31回「神田古本まつり」10月27日
11月3日 神田古書店連合目録
「古本」第16号10月20日 出来ます
送料共六〇〇円郵券可、お早目に
お申込み下さい。

東京都千代田区神田神保町1-7
田村書店
電話03(291)0563-4

書店、一九六四年）を世に問うたとき、ある雑誌の編集者が竹内氏による書評を依頼するために同氏宅に参上したところ、その夜は氏が痛飲されて、結局お引受けいただけなかった様子をつぶさにかがったことがある。竹内氏は、若い私の文章をその後もよく読んで下さったらしく、時にはお叱りも受けたが、のちに魯迅友の会会報を私に送って下さったりもした。

武田氏に関しては、七〇年代初頭の日中友好プールのなかで中国問題を二度にわたって語り合う機会に恵まれたことが忘れられない（対談「国交回復をなぜ急ぐか——日中問題を考える」、「文藝春秋」一九七一年五月号および「中国・近代百年の実像と虚像」西春彦、小堀桂一郎、江藤淳の各氏を含むシンポジウム、「季刊藝術」一九七一年夏号。それは氏の最晩年に近く、私は、氏が竹内氏とおこなった文化大革命見聞直後の対談「私の中国文化大革命観」（混々沌々 武田泰淳対談集、筑摩書房、一九七〇年所収）を読みかえしたりして対談に臨んだのだが、武田氏が私に話された言葉の端々には、氏が中国と関わってきた時間帯を超えた物の見方が潜んでいたように思う。当時、私は一年半の香港滞在から帰国したばかりで、香港の中国人社会で人気の高い、諸事万般を網羅した磨——「遼勝」のことをお話すると、大変興味を示されたので、余分の一冊を氏に送呈したこともあった。

清水幾太郎氏とは「六〇年安保」以来、現代思想研究会を経て、この八月十日で三回忌を迎えた最晩年にいたるまで親しくさせていただいたが（拙稿「清水幾太郎氏の晩年（上・下）」「朝日ジャーナル」一九八八年十一月十四日号、二十一日号、参照）、氏の中国との関わりのなかで私がどうしても納得できなかったのは、中国の核武装を、氏

が告発しつづけてきたスターリン主義的なソ連の核開発に対比して論じ、中国の核の選択を擁護しようとしたことであった。氏はのちにそのような中国シンパシーからもきっぱり訣別されたけれど、やはり日本知識人の中国との関わり方の一つの軌跡を示していたといえよう。

いずれにせよ、ここに言及した戦後日本の代表的な知識人はとも世を去られ、革命中国もいまやほぼ完全に終息してしまった。中国と関わる時間帯も、これからはさほどの意味をもたなくなるのではなからうか。

（なかじま・みねお 東京外国語大学教授）



中嶋嶺雄著

北京烈烈（上・下）

各2680円（税込）

文明の再鑄造を目ざす中国

1751円（税込）

中国革命とは何であったのか

1440円（税込）

戦後の〈文学復興〉のさかんな機運のころ、小野さんの「詩論」

（二九四七刊）が刊行された。書中の諸篇は戦争中の執筆であり、それをさらに書き継いで一書にしたものだ。「詩論」は〈抒情の否定〉として、詩人たちはもとより全文壇的に反響があった。明治・大正・昭和の永い歳月を通じて、ほとんどの詩人が疑いなく抒情精神内包の作品を積みかさねて来たのに、その歴史をくつがえすかのようにならば、〈抒情の否定〉を投じたのだった。衝撃と反響の渦紋は当然の成行きだった。

〈抒情の否定〉は一つの論理だ。もちろん私も小野詩論に眼をみはったが、詩における抒情の消滅なぞ事実としてあり得ない。小野論の本来は〈抒情の変革〉というところにあるだろうし、それを抒情否定の形で投擲したのだが、時として何らかのショックをあたえなければ、抒情はどうしようもなく質的低下を来たす。

「重油富士」（二九五六刊）に比較的近い「出発」がある。米原駅で雪をのつけた貨物列車が、その行手を北陸へと切換えられ、線路の尖端軌条が月あかりに動いた、という内容だ。この微妙な物的作動を月あかりのもとにとらえたところに、小野リアリズムが内包

する見事な抒情がある。

このほか私は「飛驒」山中を走る国鉄車輛D52や、鳥取砂丘の熱砂や風紋、また「異郷」（二九六六刊）中の「黒四ダム」などへ行ってみた。「黒四ダム」は〈日本脱出〉という意識を背景にしているが、それはすべて小野詩のドライな抒情だった。

さらに私は「重油富士」中の「燈の帯」につよく惹かれる。それというのがこの作品にいう「燈の帯」が、日本海沿いにずらっと並ぶ景観から、日本全土に点在するアメリカ軍基地とそれにつらなる各種施設の〈象徴〉を成しているからである。「燈の帯」でがんにじがらめにされた国土。小野さんの眼はそこまでひろがり、政治を嫌うアナキズム系詩人が、逆にその庶民的詩精神において「説者が、この詩集から、なんらかの意味で政治的な匂いがかかることは、私は少しもかまいません。ただそのことが、読者の心に、美として感知されますよう」云々と言った。（いとう・しんきち 詩人）

小野十三郎著作集 全3巻

第1回発売中 1詩集

7000円（税込）

空海入門 本源への帰郷

高木伸元 「カオス」の時代、人間らしさの喪われゆく時代、弘法大師の深い寂智と慈悲の実践道を甦えさせる。 定価28000円

わがふるさと浄土

ひろさちや 仏教という涅槃とは欲望をコントロールすることである。疲れた現代人に贈る生きる術としての仏教。 定価14000円

いかにして信を得るか

内村鑑三と清沢滿之／加藤智見 与えられるのではなく、自覚的に信仰を獲得した二人を通して宗教の近代化を考える。 定価26000円

西谷啓治随聞

佐々木徹 現代日本の哲学者が語る、文学、芸術、宗教。漢々と尽きざる泉の如く語り継がれる柔らかなダイアローグ。 定価20000円

宮沢賢治 季刊仏教 No.13

対談修羅・善隆・ユートピア河合隼雄・國見俊輔／別役実・林洋子・福島泰樹・宮沢雄造・畑山博・紀野一義・谷川雅他 定価12000円

法蔵館

600京都市下京正面鳥丸東入
075・343・0458

昭和55年10月23日第三種郵便物認可 平成2年10月1日発行（毎月1回1日発行・通巻235号）

ISSN 0914-9163

NO.235

あま

1990 10

